

第三章 ローマ帝国崩壊後の都市・町の勃興と発展

ローマ帝国の崩壊後、都市の住民が農村の住民より優遇されたわけではない。彼らの社会的性格は、古代ギリシャやイタリアの共和政初期の都市住民とは大きく異なる。後者は、公有地の分配を受けた地主が近くに住み、共同防衛のため城壁で囲んだことに始まる。他方、崩壊後の地主は各自の要塞化した城に拠り、小作人や従属民を周囲に従えた。都市の主な住民は商人と職人で、その身分は奴隸的、少なくともそれに近かったと見られる。欧州の主要都市に与えられた古い勅許状に掲げられた特権（領主の同意なく娘を嫁がせる権利、死後の動産が領主ではなく子に相続される権利、遺言で財産を処分できる権利）は、これらが認められる以前、彼らの地位が農村の土地占有者と同様に、全面的いしほぼ農奴的隷属（ヴィレナージ）にあったことを物語る。

当時の都市住民はきわめて貧しく、卑賤と見なされ、商品を担いで町や定期市を渡り歩く行商として暮らした。欧州各地では、今日のアジアのタタール系政権に見られるのと同様、旅人とその貨物に通行ごとの課税が広く行われ、特定荘園の通過、橋の通行、市場内での運搬、露店や仮小屋の設置にまで税が課された。イングランドでは、これら

は passage・pontage・lastage・stallage と呼ばれた。国王や大領主は、ときに直轄領の住民など特定の商人に、これらの税の一括免除を与え、彼らは他の点で身分が低くても、この特権ゆえに「自由商人」と称された。見返りに彼らは庇護者へ年ごとの人頭税を納め、この保護は無償ではなく、その税は免税による他税収の欠けを補うものと解された。制度の初期には、免税も人頭税も純然たる個人的特権で、本人の存命中、または庇護者の裁量が及ぶ間に限られていた。イングランドの『ドゥームズデイ・ブック』に拠る諸都市の不完全な記録には、かかる保護の対価として個々の市民が国王または大領主に納めた税、あるいはその総額のみが記されている例が少なくない。

町の住民の出自がどれほど隷属的であつたにせよ、彼らが自由と独立に達したのは、農村の土地占有者より明らかに早かつた。各都市の人頭税にもとづく王室収入は、通例、一定年期・定額の徴税請負（ファーム）として郡保安官やその他の請負人に与えられたが、やがて町の有力市民が十分な信用を得ると、自市のこの種の歳入を一括して請け負い、請負額の全額に連帯責任を負うのが常となつた。このファーム方式は欧州諸君主の一般的な財政運営とも一致し、王は莊園全体をテナント全体に貸し付け、彼らは全地代の連帯責任を負う代わりに徴収方法を自ら定め、自前の代官を通じて王室財務府に納め

た。王の官吏の横柄さから解放されることは、当時、何より重んじられたのである。

当初、町の徴税請負は他の請負と同様に年期限定で市民に与えられていたが、のちに将来は増額しない定額賃料を条件に、その権利を永代で授与するのが通例となった。納付が恒久化すれば、対価たる免税も恒久化する。こうして免除は個人の特典から市民身分に結びつく権利へと変わり、町は自由都市と呼ばれ、市民は自由市民・自由商人と称された。

永代の徴税請負が授与されると、前記の三つの重要特権（領主の同意なく娘を嫁がせる権利、死後に子が財産を継ぐ権利、遺言で財産を処分する権利）も、その町の市民に広く与えられるのが通例となった。これらの特権がそれ以前から個々の自由商人に「交易の自由」とともに与えられていたかは確証がないが、そうであった可能性は小さくない。いずれにせよ、この付与によって農奴・奴隸的身分の核心的な拘束は解かれ、彼らは少なくとも現代的な意味での自由を実質的に獲得した。

それだけではない。彼らは同時に、法人格をもつ自治の共同体として組織され、独自の治安判事と市参事会を置き、自治の細則を定め、城壁を築いて自衛する権限を得た。さらに、住民に見張りと守備を課し、昼夜を通じて城壁を警護させるなど、軍事的な統

制を行うことも許された。イングランドでは、こうした町はおおむね百人区裁判所や州裁判所の管轄から外され、王権に関わる事件を除く町内の訴訟は、自前の裁判官が裁いた。他国では、この範囲を上回る、より広く強力な司法権が与えられることもしばしばあった。

自前の歳入徴収（ファーム）を許された町には、住民に納付を強制できる司法権を与える必要があった。無秩序の時代に、この種の執行を他の法廷に頼るのは、きわめて不便だったからである。とはいえ、欧州の諸君主が、自然増が最も見込め、しかも手間も費用もほとんどかからない収入源を、将来不増の定額地代と引き換えに手放し、さらに自国の中心に一種の独立共和国をみずから築く道を選んだのは、驚くべき判断であった。この点は、当時の欧州では、領土の隅々まで権力を行き渡らせ、弱者を大領主の圧迫から守り切れる君主がほとんどいなかったことを思えば理解できる。法の庇護が届かず自衛も難しい人びとは、保護の代償として大領主の奴隷・家臣となるか、互いの安全のための共同防衛同盟に加わるしかなかった。都市の住民は、個々では無力でも、隣人と結束すれば侮れない抵抗力を発揮できた。他方、大領主は町人を下位身分、ひいては解放奴隷の寄せ集めと見下し、その富に嫉妬と憤りを募らせ、機会があれば容赦なく収奪

した。町人は領主を憎み恐れ、国王もまた領主を憎み恐れたが、町人を敵視する理由は乏しかった。こうして利害は一致し、町人は国王を支え、国王は彼らを領主に抗する味方として支えた。国王は、治安判事と市参事会の設置、自治細則の制定、城壁の築造、住民への見張りと守備の義務付けといった軍事的規律を認め、与え得るかぎりの安全と独立の手段を授けた。規則的な自治政府と、住民を一定の計画に従わせる権威がなければ、任意の互助同盟だけでは、恒久の安全も国王への実効的支援も望めなかったからである。さらに国王は、町のファームを永代・将来不増の定額で与え、地代引き上げや他者への下付といった将来の圧迫への疑念を断ち、互いの不信の根を除いて、堅固な同盟関係を築いた。

一般に、大領主と不和な君主ほど、都市への特権付与に寛大であった。イングランド王ジョンは、諸都市の著名な庇護者として知られる。フランス王フィリップ一世は大領主を抑えられなくなり、治世の末には、のちの「肥満王」ルイ六世となる子ルイが、王領の司教たちに大領主の横暴を抑える策を諮問した（ダニエル師）。答申は二点（王領の有力都市ごとに治安判事と市参事会を置いて新たな司法秩序を築くこと、住民を各都市の治安判事の指揮下で国王を助ける民兵として組織すること）であった。フランスの

古学者は、同国の都市における長官・評議会制度の起点を、この時期に置いている。ドイツでも、シュヴァーベン家（シュタウフェン家）の不遇な治世に、多くの自由都市が初めて特権を得、名高いハンザ同盟が初めて強大な力を示した。

当時、都市の民兵は農村の兵に劣らず、むしろ即応性で勝り、近隣領主との争いでしばしば優位に立った。政権の中心から遠く、地勢も堅固で、君主の権威が及ばなくなったイタリアやスイスでは、都市は独立共和国となり、周辺の貴族を従えて田園の城塞を破却し、市内居住を義務づけた。これはベルン共和国をはじめとするスイスのいくつかの都市の歴史であり、ヴェネツィアを除けば、十二世紀末から十六世紀初頭に興亡したイタリアの有力都市共和国も、おおむね同じ道をたどった。

フランスやイングランドのように王権が弱まっても崩壊しなかった国々では、都市が完全に独立する余地はほとんどなかった。それでも都市の影響力は増し、国王は都市の同意なしに、町の定額ファーム地代を超える新税を課せなくなった。その結果、都市は王国の身分制会議に代表を送り、聖職者・諸侯とともに、緊急時の臨時援助（特別課税）の付与を承認する役割を担った。しかも都市代表は概して王権寄りであったため、国王は会議で彼らを、大領主の権勢への牽制として用いた。これが、欧州の主要君主国

における全国身分制議会での自治都市代表の起源である。

こうして都市には秩序と善政が行き渡り、個人の自由と安全も確かなものとなった。

他方で農村の土地占有者はあらゆる暴力にさらされ、無防備な人びとは、余計な蓄えを持たず抑圧者の不正を招くと恐れ、最低限の糧で暮らすほかなかった。逆に、働きの成果が確実に守られるなら、人は境遇の改善に励み、必需だけでなく便利さや優雅さも求める。ゆえに、生計を超える富を目指す産業は、農村に広まる前にまず都市で根づいた。ヴィレナージ（農奴的隷属）に縛られた貧しい耕作者が、わずかな元手を得ても、それが主人の物とされるのを恐れて隠し、機を見て町へ逃れた。当時の法は都市に寛大で、領主の農村支配を弱める狙いもあり、町で一年追及を受けずに過ぎれば終身の自由を得られた。結果として、農村の勤勉な人びとの蓄えた資本は、持ち主の安全を守る唯一の避難所として、自然に都市へ集まった。

たしかに都市の住民は、結局のところ、生活の糧も産業の資材や手段も農村に依存する。しかし、海岸や通船できる大河のほとりの都市は、供給源を近隣だけに限る必要はない。自分たちの製造品との交換、あるいは遠隔地相互の運送と仲介によって、一方の産物を他方と取り替え、はるかな地からも調達できる。ゆえに、周囲の農村や取引相手

の地域が貧しくとも、各地の小さな供給を束ねれば大きな供給となり、都市だけが大きいに富み栄えることがある。当時の商圏は狭かったが、それでも富み勤勉な国は存在した。存続期のギリシア帝国（ビザンツ）とアッバース朝のサラセン帝国、さらにトルコ征服以前のエジプト、北アフリカのバルバリア海岸の一部、ムーア人の支配下にあったスペイン諸州（アル＝アンダルス）である。

欧州で最初に商業の力で目覚ましい繁栄に達したのは、イタリアの諸都市と見なされる。当時イタリアは、文明と改良の進んだ世界の中心にあった。十字軍は資本の浪費と人口の損耗を招き、欧州全体の進歩を遅らせたが、いくつかのイタリア都市にはかえって追い風となった。聖地を目指して各地から動員された大軍は、ヴェネツィア・ジェノヴァ・ピサの海運に異例の需要を生み、兵の輸送と継続的な補給を託した。要するに、これらの都市は軍の兵站を担い、欧州を覆った破壊的な熱狂が、皮肉にも彼らの富の源泉となったのである。

交易都市の住民は、富裕な国の洗練された製造品や高価な贅沢品を輸入して大土地所有者の見栄を満たし、その見返りに大土地所有者は自領の未加工の産物を大量に売り出して、それらを競って買い求めた。こうして当時の欧州通商の多くは、自国の粗い一次

産品と、より文明の進んだ国々の製造品との交換を基盤とした。たとえば、イングランドの羊毛はフランスのワインやフランドルの上質な毛織物と引き換えられ、同じ構図で今日に至るまで、ポーランドの穀物はフランスのワインやブランデー、さらにフランスやイタリアの絹やビロードと交換されている。

対外貿易は、精巧で高度な製品を好む風風を、当初その製造がなかった国々にも広げた。この嗜好が広まり、需要が十分に育つと、商人は運送費を省くため、同種の製造を国内に据えるのが自然である。これが、ローマ帝国崩壊後の西欧における遠隔市場向け製造業の出発点である。他方、どんな大国でも製造が全くないことはなく、「製造業がない」とは、洗練された高級品、すなわち遠方販売向けの部門を欠くという意味にすぎない。どの大国でも、大多数の人びとの衣料や家財は、おおむね自国の産業で賄われ、この傾向は「工業に乏しい」とされる貧しい国ほどむしろ強い。逆に、製造が盛んな豊かな国では、最下層の衣服や家庭用品でさえ、貧しい国より外国製の比率が高いのが常である。

遠方販売向けの製造業は、各国に広がる際、主として二つの道筋をたどったと見られる。

特定の商人や起業家が資本を投じ、先進地の製造をまねて、力強く導入する道筋である。これは対外商業の産物で、その始まりは十三世紀にルッカで栄えた絹・ビロード・ブレードであった。マキアヴェッリが称えたカストルツィョ・カストラカーニの専横により、一三一〇年に九百家族が追放され、そのうち三十一家族がヴェネツィアへ移り、絹業の導入を願い出て特権を得、三百人の職工で操業を始めた。フランドルの上質な毛織物も同じ流れで、エリザベス一世治世の初めにイングランドへ移植された。今日のリヨンやロンドン・スピタルフィールズの絹業もこの系譜に属する。模倣型であるため、原料は外国依存になりやすい。創業期のヴェネツィアはシチリアやレバントから原料を得、より古いルッカの製造も同様であった。桑栽培と養蚕は十六世紀以前の北イタリアでは一般的でなく、フランスでの導入もシャルル九世の時代を待った。フランドルの製造は主にスペインやイングランドの羊毛に依存し、イングランドで最初に遠方販売に耐えた毛織物もスペイン羊毛を用いた。リヨンでは今なお原料絹の半分以上を輸入に頼り、創業当初はほぼ全面的に外国産であった。スピタルフィールズの原料が英国産に置き換わる見込みも乏しい。この種の製造の立地は、多くの場合、少数の発起人の判断に左右され、海港都市にも内陸都市にも据えられた。

一方で、遠隔地向けの製造業が、どんなに貧しい国にもある家内的で粗い生産から、段階的に洗練されて自然に育つ道筋もある。多くは自国の原料を使い、海岸や通船可能な川から遠い内陸で先に高度化する。肥沃で耕しやすい内陸は、耕作者の生活維持を超える余剰食糧を生むが、陸送費や河川航行の不便のため外部への搬出が難しい。そのため食料は豊富で安く、職工が定着しやすい。職工は土地の産物を加工し、できた品（またはその代金）と引き換えに、さらに原料や食糧を受け取る。こうして余剰の粗生産には、水辺や遠隔市場までの運賃を省くかたちで新たな価値が加わり、耕作者は有用で快適な品を以前より安く手にできる。余剰は高く売れ、必需は安く買えるので、耕作者は土地改良と耕作の向上によって、さらに余剰を増やす意欲と手立てを得る。すなわち、肥沃さが製造を生み、製造の進展が肥沃さを押し上げる好循環である。製造はまず近隣の需要を満たし、品質が高まるにつれて遠隔市場へ広がる。粗い産物は陸送に向かないが、精緻な製品は小さな容積に価値が凝縮され、運搬に耐える。たとえば重さ八十ポンドの上質布には、同量の羊毛代に加え、多数の工人と雇用主の維持に当たる、しばしば数千ポンド分の穀物の価値が織り込まれる。穀物はそのままでは運びにくくとも、布という完成品に姿を変えれば、事実上輸出され、世界の隅々に届く。こうしてリーズ、ハ

リファクス、シェフィールド、バーミンガム、ウルヴァーハンプトンの製造は自然に成立した。これらは農業が生んだ産業であり、その拡張・改良は、対外商業の所産として生まれた製造より、概して後れた。イングランドがスペイン産羊毛による上質布で名を上げたのは、これらの地の産業が輸出に耐えるようになるよりも一世紀以上早かった。こうした後発の伸長が可能になったのは、農業の拡大と改良によるものであり、これは対外商業と、それが直接もたらした製造業の効果のうち最後にして最大のものである。これについては次章で詳述する。